

第5章 軍国主義教材の特質

第1節 軍国主義教材の数量集計

第1項 軍人・軍生活教材増加の傾向

国定第四期と国民科国語の教科書教材を軍国主義教材、国家、天皇、軍・軍組織、軍人・軍生活、軍備・兵器に分類して集計した。「軍・軍組織」は、ラジオで戦局を聴く、大演習の様子、少年隊の様子、戦闘行為、日本海海戦、軍が地域住民を救済、軍旗の説明、軍艦マーチなどの内容であり、「軍人・軍生活」は出征した兄からの手紙などである。また、軍人が兵士の仕事を紹介した文もあった。「軍備」は、潜水艦の見学、戦艦・戦車の映画鑑賞などである。また、育てている馬が軍馬になってほしいという詩や、軍犬の育成、伝書鳩育成などが入る。集計の結果の通り、軍国主義教材の総数は国定第四期に比べて国民科国語では2.4倍に増加している。教材の内訳を見ると、図5-1の通り、国家、天皇などの教材よりも軍人・軍生活に関する教材の増加が顕著であった。ここからも、国民科国語は国定第四期をベースにしつつも、軍人・軍生活や軍組織の教材を増やし、超国家主義教育というよりも、軍国主義教育であると言えよう。

図5-1 国定第四期と国民科国語の軍国主義教材数の比較⁽¹⁾

実数で比較しても、軍人・軍生活の教材は表5-1の通り、国定第四期が9教材なのに対し、国民科国語では35教材と、3.9倍も増加している。

表5-1 国定第四期と国民科国語の軍国主義教材数の比較

	国家	天皇	軍・軍組織	軍人・軍生活	軍備・兵器	計
国定第四期	1	13	2	9	11	36
国民科国語	9	15	10	35	19	88

軍国主義を児童に植え付けるのであれば、行軍や戦闘行為などの武勇伝を多くすると思われるが、国民科国語の教材は、軍人や軍の生活についての教材が多く、戦闘行為の教材が少ない。

第2項 戦時下の教科書編纂の影響

軍国主義教材を学年別集計に集計した。国定第四期の集計が表5-2である。軍国主義教材は国民科国語よりも少ないが、軍国主義教材比率で見ると、天皇と軍備・兵器が多い点が国民科国語と異なる。

表5-2 国定第四期の学年別軍国主義教材数一覧

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	軍国教材比	全教材比
国家	1	0	0	0	0	0	1	2.8%	0.3%
天皇	0	2	8	1	1	1	13	36.1%	4.2%
軍・軍組織	0	0	0	0	0	2	2	5.6%	0.6%
軍人・軍生活	1	2	1	1	3	1	9	25.0%	2.9%
軍備・兵器	2	0	2	3	2	2	11	30.6%	3.5%
計	4	4	11	5	6	6	36		11.5%

国民科国語の集計が表5-3である。全体的に高学年で増加していることがわかる。また、低学年では軍（行軍を含む）がなく、軍人・軍生活の比率が高い。

表5-3 国民科国語の学年別軍国主義教材数一覧

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	軍国教材比	全教材比
国家	2	1	1	2	1	2	9	10.2%	2.9%
天皇	0	1	6	3	4	1	15	17.0%	4.8%
軍・軍組織	0	0	1	2	3	4	10	11.4%	3.2%
軍人・軍生活	3	7	5	6	9	5	35	39.8%	11.2%
軍備・兵器	1	2	3	4	4	5	19	21.6%	6.1%
計	6	11	16	17	21	17	88		28.1%

この学年別の集計には戦局との関係が深い。国定第四期では3年で一時的に増加するが、ほぼ同じ数の軍国主義教材が各学年に分布している。国民科国語では、3年から急激に増加している。これは発達段階を考慮しただけではないであろう。国民科国語の1、2年の教科書編纂は、1940(昭和15)年から1941(昭和16)年の7月頃までである。3年の教科書編纂の最中に開戦しているので、開戦後の戦時下に編纂した3年以後に軍国主義教材が増加したのである。

第3項 生活と密接な軍国主義教材

国民科国語の教材を「ミリタリズム」と切り離して、地理、歴史、自然、科学、産業、文学、伝記、生活(学校、家庭、地域社会、民話)、言語、に分類して集計し、軍国主義の内容を別次元で集計した。どのような内容の教材に軍国主義の素材が入り、教材を軍国主義化したかを明らかにするためである。表5-4は軍国主義教材がどのような内容になっているかの一覧である。戦艦や潜水艦の教材は軍備そのものであるが、「産業」に含めた。また、戦闘行為については、戦地が明らかな場合は「地理」に、児童が軍隊を訪問する場合は「生活-地域社会」に含めた。「地域社会」では、兵士を慰問したことや、海軍のカッター競争見学、など、潜水艦などの軍備見学が多い。

表5-4 国民科国語の軍国主義教材と内容

	地理	歴史	自然	科学	産業	文学	伝記	生活 学校	生活 家庭	生活 地域 社会	生活 民話	言語	計	軍国教 材比	全教材 比
国家	2					1		2		4		1	10	11.4%	3.2%
天皇	1		1		1	6	5			1			15	17.0%	4.8%
軍・軍組織	4	1			1		1		1	2			10	11.4%	3.2%
軍人・軍生活	3	2		1	1	6	6	1	8	6			34	38.6%	10.9%

軍備・兵器	3		5		6	1		1	1	1		1	19	21.6%	6.1%
計	13	3	6	1	9	14	12	4	10	14		2	88		28.1%
軍国教材比	14.8	3.4	6.8	1.1	10.2	15.9	13.6	4.5	11.4	15.9	-	2.3			

この結果では、「地理」「文学」「生活－地域社会」の内容が多いが、「生活」をまとめると31.8%もあり顕著である。「地理」教材は日本国内と満州や東南アジアであり、日本軍が東南アジアまでに進出していること、アジアを支配下に入れることを肯定するための教材になっている。「文学」では、古事記などの神話が多く、天皇が詠んだ短歌なども多い。文語文では国民学校期の戦局よりも、古典での軍事や天皇についての教材が多い。特に着目するのは、「生活」での比率が高いことである。国民学校の目標に児童の生活を重視することが挙げられている。軍国主義教材が生活と結びつくと、児童は軍や兵士を身近な存在として考えることになり、児童を自ら主体的に軍国主義へと導くことになってしまうのである。この中で、戦闘行為を直接に描いたのは、4教材と少ない。三勇士、敵前上陸、レキシントン撃沈記、珊瑚海の勝利、だけである。他は生活と結びついた教材が多い。

数量調査からは、国民科国語の軍国主義教材は、「ナショナリズム」よりも「ミリタリズム」の教材であり、軍人・軍生活を多くし、児童にとって兵士の気持ちを生活に結びつけた教材から理解させることで軍国主義を促進していたことが明らかになった。生活に結びついた教材は児童にとって身近な存在として兵士や軍備を捉え、児童が主体的に自ら軍国主義を肯定的に受け入れるように仕組まれていたの

第2節 軍国主義教材の修正内容調査

第1項 国定第四期から修正された教材の傾向

第二に軍国主義の教材が国定第四期からどのような観点で修正されたかという点で調査した。まず、国定第四期から同一の教材、修正された教材、新規教材を調査した。調査は次の基準で行った。

「◎」本文がほぼ同じ(修正が全体の1/5以内の場合)

「○」本文に変更有り(修正が全体の1/5以上あり、題材や展開にあまり変更がない場合)

「△」題材が同じ(素材や展開は同じであるが、文体や形式、主人公が異なるなどの修正がある場合)

「 」新規教材

この集計の結果、国民科国語の軍国主義教材88教材の継承関係は図5-2の通りである⁽²⁾。国定第四期を継承した◎と○の教材数は、29教材であった。題材が同じを含めると、36教材で、これは国定第四期の軍国主義教材と同数になるが、国定第四期の教材を国民科国語で分割した例もあり、同一教材数にはならない。

図5-2 国民科国語の軍国主義教材の本文比較

次に、この◎、○、△、の継承関係を軍国主義教材の内容で分類すると、表5-5の通り◎や○など継承されている教材では、「天皇」「軍備・兵器」「軍人・軍生活」が多く、新規教材では「軍人・軍生活」が多い。これは戦時下に教科書編纂をしたために、父や兄などの家族が出兵する場面や、戦地からの手紙を扱ったり、一時帰宅した教材があるためであろう。

表5-5 軍国主義教材のうち継承関係の教材数

	◎	○	△	新規	計	%
国家	2	1		6	9	10.2%
天皇	6	3	2	4	15	17.0%
軍・軍組織	2	1		7	10	11.4%
軍人・軍生活	6	2	3	24	35	39.8%
軍備・兵器	3	3	2	11	19	21.6%
計	19	10	7	52	88	
%	21.6%	11.4%	8.0%	59.1%		

また、この◎、○、△の継承関係を内容で分類すると、表5-6の通り、◎の19教材のうち、「文学」が5教材、「伝記」が4教材と、文学的な文章の教材に継承関係が見られる。

表5-6 軍国主義教材のうち内容で分類した継承関係の教材数

	◎	○	△	新規	計	%
地理	1	1	1	10	13	14.8%
歴史	1			2	3	3.4%
自然	2	2		2	6	6.8%
科学				1	1	1.1%
産業			1	8	9	10.2%
文学	5	3	1	5	14	15.9%
伝記	4		2	6	12	13.6%

生活－学校		1	1	2	4	4.5%
生活－家庭	2	1		7	10	11.4%
生活－地域社会	3	2	1	8	14	15.9%
生活－民話					0	0.0%
言語	1			1	2	2.3%
計	19	10	7	52	88	
%	21.6%	11.4%	8.0%	59.1%		

「文学」の教材には和歌などの韻文や古文があり、それらは時代を超えても国家主義として生き延びた教材であろう。これに対して、新規教材では、「地理」や「産業」、「生活－地域社会」が多い。戦時下では、東南アジアへの侵攻により、「地理」や軍艦などの「産業」、軍人生活などの「生活－地域社会」などが増えたためであろう。

第2項 修正された教材の内容

以上の調査から、修正された教材の中から、国定第四期3年『小学国語読本 巻五』「二十二 犬のてがら」⁽³⁾と、同教材を修正した国民科国語3年『初等科国語 一』「二十一 軍犬利根」⁽⁴⁾とを比較する。

国定第四期の「犬のてがら」は軍犬である金剛・那智が戦地で銃撃を受けながら最後まで活躍した姿を描いた4頁ほどの短編であるが、国民科国語では利根という犬の活躍で、16頁ほどの中編となっている。国定第四期は金剛・那智の活躍を中心に描いているのに対して、国民科国語では利根を育てた文子さんの心情描写に始まり、利根の活躍に感動した文子さんを描いて終わっている。文子さんを中心に描かれ方になっている。

教材本文の冒頭、中、最後の比較は表5-7の通りである。

表5-7 「犬のてがら」「軍犬利根」の教材比較（抄）

	国定第四期「犬のてがら」	国民科国語「軍犬利根」
冒頭	<p>満洲事変の最初の夜の事でした。我が軍にしたがつて、伝令の役をして居た軍犬金剛・那智は、いよいよとつげきとなると、我が軍のまつ先につき進んで、敵軍の中にとびこみ、死物ぐるひで、かみつきました。</p>	<p>利根は、小さい時、文子さんのうちで育てられた、勇ましい軍犬です。文子さんが、ちょうど三年生になったばかりのころ、をぢさんのうちから、子犬を一匹もらって来ました。その親が、軍犬として、戦地ではたらいっていると聞いた文子さんは、もらった子犬も、りっぱな軍犬にしてみたいと思ひました。子犬には、利根といふ名をつけました。それは、をぢさんの家のそばを流れている、大きな川の名を取って、おとうさんがおつけになったのです。文子さんのうちでは、みんな犬がすきでした。利根の来るずっと前にも、犬をかつていたことがあるので、文子さんは、ほんたうによく、利根をかまひがりました。朝夕、からだの毛をすいたり、きれでからだをふいてやったりしました。毎日、きまったやうに、運動をさせてやりました。たべものにもよく気をつけて、間食などは、できるだけさせないやうにしました。おかげで、利根は、子犬のよくかかる病気にもならないで、すくすくと育ちました。</p>
中	<p>はげしい戦の後、敵は、とうとう陣地をすて逃げました。をりから上る朝日の光に、高くかかげた日の丸の旗は、勇ましくかまやきました。万歳の声は、天地ことどろきました。しかし、あの金剛・那智は、どこへ行つたのでせう、いくら呼んでも、かへつて来ませんでした。犬のかかりの兵士は、一生けんめいになつてさがしました。とうとう見つけました。けれども、それは、をり重なつて死んで居る敵の死がいの間でした。</p>	<p>「ようし、来い、利根。」と、兵隊さんは呼びました。利根は、もう百メートルで本部といふところへさしかかりました。ちょうどその時、敵の弾が、ばらばらと飛んで来ました。利根は、ぱったりとたふれました。 「ようし、来い、利根。ようし、来い、利根。」と、かかりの兵隊さんは、気がくるつたやうに呼びつづけました。この声が通じたのか、利根は、むっくりと立ちあがりました。しかし、もう走る力がありません。かかりの兵隊さんは、敵の弾が飛んで来るのもかまはず、はふやうにかけ出して、利根のからだを、しっかりとだきかかへました。</p>
末尾	<p>二匹は、身に幾つものたまをうけて、血にまみれて死んで居ました。よく見ると、二匹とも、口には、敵兵の軍服の切羽はしを、しつかりとくはへて居ました。これを見た兵士は、思はず涙ぐみました。軍犬の金鵄勲章ともいふべき甲号功章を、始めていたゞいたのは、実にこの金剛・那智でありました。</p>	<p>利根のてがらは、かかりの兵隊さんから、くはしく文子さんに知らせて来ました。さうして、おしまひに、利根は、足をやられただけですから、まもなく、よくなることと思ひます。利根は、そのうち、きっと甲号功章を、いただくにちがひありません。と書いてありました。この手紙を見て、文子さんは、 「まあ、利根が。」 といったまま、つぶつぶして、泣いてしまひました。 「利根はえらい。感心なやつだ。」 と、おとうさんも涙を流しながら、お喜びになりました。</p>

本文を一見してわかるのは、国定第四期では軍犬の活動を描いたのに対して、国民科国語は育てた文子の心情を描いた点である。主人公に学習する児童と同じ年代の女子を設定し、軍犬の世話をよくして、戦地に送り出す。そして、手柄を聴いて喜ぶという構造になっている。

国定第四期では、『小学国語読本総合解説 巻五』⁽⁵⁾で佐野保太郎がこの教材の目標を執筆している。

犬でさへ、かうしてお国の為には命を捨てて働くのである。まして人たる我々は、一旦緩急あれば、一身一家をかへりみず、御国の為に尽さなければならぬといふ、強い国民的精神を児童の心中に培

養する (6)

佐野保太郎は犬の献身的な働きを見て、「御国の為に尽」す「強い国民的精神」を児童の心の中に植え付けることを目標とし、国家主義のための教材として位置づけている。

国民科国語では、教師用書に次のように教材の趣旨が書かれている。

本教材は、軍犬が如何に養成され、訓練され、しかもまた如何にめざましく活動するかを具体的に表現したのであるが、特にこの可憐な戦士の生い立ちを、児童の生活と結んだところに教育的意義の深いものがある。そこには人と犬との一体的境地が描かれ、動物愛護の精神に培う面があり、その飼育訓練には、児童自身の日常の修練をおのづから反省せしめる面がある。また勇ましい軍犬美談に感激するとともに、それが自分の生活から離れたものでないとするところに、愛犬を通じて報国の精神に燃えしめる面がある。もとより国語教材であるから、文章を読ませ、文章に即しつつ、これらの精神をおのづから感得せしむべきであることはいふまでもない。(7)

国民科国語では軍犬の訓練と活躍から、「人と犬との一体的境地」を読み取り、「児童自身の日常の修練をおのづから反省」させ、「自分の生活から離れ」ずに、「報国の精神」を体得させることを目標に設定している。それも、報国の精神を持つという教師から押しつけられたものではなく、「文章を読ませ、文章に即しつつ、これらの精神をおのづから感得せしむ」という、児童自ら文章を読みつつ、自発的に報国精神を持つように指導することが教師に求められている。教材の価値は、この教材を読んで児童が自発的に軍国主義化させるように設定したところにある。

それも、登場人物の文子を「ちょうど三年生になったばかりのころ」と、学習者と同じ三年生に設定したことから、文子の心情に共感し、軍犬の働きを自分に投影して、児童自らも戦地へ赴いて国のために犠牲になることが尊い、あるいは戦争のために軍犬を育てるという貢献をすることが尊いという思想を植え付けることになっているのである。

その方法は、ただ本文を読むだけではない。教師用書の「取扱の要点」の「読むこと」では次のように指導の注意点が説明されている。

特に利根が戦場ですばらしい軍功をたてる場面は、朗読を主としてその勇壮な気分を味ははせ、利根の活躍に感じさせるやう取扱ふことが肝要である。(8)

朗読することが「勇壮な気分を味ははせ」るためであり、「利根の活躍に感じさせる」ための目的になっている。これと、「おのづから感得せしむ」という教材の趣旨から考えれば、軍国主義の内容を知識として教えるのではなく、文章を読み、朗読することで、感動し、国に貢献するためにも戦地へ赴き活躍することや、軍犬を育てるなどの間接的な支援をする気持ちを自発的に起こさせようとしたのである。

「話すこと」でも、「文子さんが返事を出したことを考へさせ、その返事を書かせて発表させてもよ

い」とあり、兵士への手紙を書かせて発表させるのであるが、それは当然、利根の活躍と利根を守った兵士への感謝が書かれるはずであり、兵士と関わりを持つこと、兵士へ手紙を書くことの抵抗感をなくし、日常的に兵士と児童が手紙を通じて関わる気持ちを持たせるための学習活動になっている。

「書くこと」では本文を書き取る指導をすることが書かれている。そこでは、本文を修正した文章がいくつか引用されていて、その一部は次の通りになっている。

戦場で、敵のいるところをさがしあてました。
部隊は、何倍といふ敵を相手に、はげしく戦ふ時が来ました。
兵隊さんが、とねのはたらきを見て、涙を流すほどでした。
わが軍が、敵の陣地にとつげきする日が来ました。
とねは、きっと甲号功章を、いただくでせう。(9)

このように文字指導で教材本文を修正した文を書くことで、その文の内容を理解し、本文の理解をより深めていこうとしている。そして、「とねは、きっと甲号功章を、いただくでせう。」と功績があることが尊いように感じさせるのである。

国民科国語での書き換えの例として「軍犬利根」を取り上げたが、この大幅な書き換えの意図は、本文の主人公を学習者と同年齢にし、その主人公が感じた気持ちを学習者が理解することで、児童自ら内発的に軍国主義の精神を起こさせ、国のために戦争に参加し、犠牲になってでも功績を挙げようとする意欲を喚起するためであったと言えよう。そのためには、知識授与ではなく、児童の自由な読みや、朗読など音声言語指導が使われたのであり、「読むこと」「話すこと」「書くこと」が軍国主義のための活動になっていた。国民科国語の特徴が児童の言語活動を重視することであれば、その言語活動を重視することが軍国主義教育促進の方法になっていたのである。

このような書き換えは少数であるが、新規の教材に「生活」の内容が多くあり、それも「軍人・軍生活」のことが多いことは、児童が教材に登場する兵士の心情を理解していくところにある。それも、児童の日常生活と結びつく内容であり、国民科国語の新規の軍国主義教材は、「軍犬利根」と同じ方法によって軍国主義思想を植え付けようとしていた。

第3項 国民科国語で削除された軍国主義教材

国定第四期から国民科国語にかけては軍国主義教材が増加しているが、一方でいくつかの国定第四期の軍国主義教材が削られている⁽¹⁰⁾。

削除された教材のうち着目したいのが、国定第四期6年巻十一「二十七 空中戦」⁽¹¹⁾である。この教材は戦闘機の空中戦の様子を説明した文章であるが、実弾の攻撃を描写していて、戦闘行為を生々しく描写している。以下、その部分を引用する。

とたんに、今度は「ピュッ、ピュッ、ピュッ。」と耳もとをかすめる鋭い音。後、下方から迫る敵機の機関銃弾だ。生意気なと思ふ間もあらず、

「タ、タ、タ、タ、タ、タ、\ \ \ \。」

我が後方機関銃が、ものすごく鳴った。忽ち黒煙を吐くと見る間に、火に包まれた敵機が直下に落ちて行く。

「万歳。」

思はず機上に歓声が湧いて、しばし爆音を圧する。かうした敵に直面しながら、我が爆撃編隊群は、一糸乱れぬ隊形を以て刻々目標に迫る。飛行場は目前に来た。そこには、まだ飛上れないでもがいている飛行機がある。其の周囲を、右往左往する人影がある。すかさず、編隊群長の爆撃開始命令が下った。

「それつ。」とばかり、一弾、二弾、続いて第三、第四\ \ \ \。

機の胴体から離れた爆弾は、糸を引くやうに目標めがけて落下する。一瞬にして、飛行場にものすごい黒煙がうづ巻いた。全弾命中。何といふ痛快さだ。

「天皇陛下万歳。」

と、思はず誰かが叫ぶと、

「万歳、万歳。」

一同の声が感激に震へた。(12)

このように激高した文章であり、なおかつ戦闘行為を詳しく描写している。兵士の必死の戦闘を描いているので、軍国主義教材としてはふさわしいのであるが、削除されている。その理由は不明である。

「空中戦」に類似する戦闘行為を描いた教材に国民科国語6年「附録四 珊瑚海の勝利」⁽¹³⁾があるが、「空中戦」に比べれば表現が穏やかである。

すは、決戦である。世界戦史上、いまだかつてなかつた航空部隊と航空部隊との決戦である。場所は、パプアの東端から数十海里の海と空だ。時間のたつのがもどかしくてならない。八時四十分、敵の一機が偵察に来たが、わけもなく撃退される。と、豫期にたがはず、一大勝報が、電波に乗ってやって来た。

「サラトガ型撃沈。」やつた。とうとうやつた。われら最大の目標であつた敵航空母艦サラトガ型は、かくて珊瑚海に捧げるすばらしい供へ物となつた。荒鷲、よくぞやつてくれた。目がしらが、じいんと熱くなつて来る。そこへまた敵航空母艦ヨークタウン型撃沈の勝報である。全身が勝利の喜びで震へるのを、どうともすることができない。(14)

この文章では、「空中戦」のような戦闘行為の臨場感はない。戦闘行為の記録よりも、戦地での記録という形式をとっている。他の国民科国語の皇国教材の多くは、軍人の心情説明をしているものであり、交戦中のその場を描写した教材は少ない⁽¹⁵⁾。次の教材は、国民科国語3年「四 支那の春」⁽¹⁶⁾だが、低学年のためか、戦闘行為の描写はない。

兵たいさんは、今日は銃を持ってゐません。てつかぶともかぶってゐません。二人とも、ほんたう

に久しぶりのお休みで、村のはづれまでさんぽに来たところです。

「兵たいさん。」

「兵たいさん。」大きな声で呼びながら、支那の子どもたちが、六七人やって来ました。

「おうい。」兵たいさんがへんじをすると、みんな一度に走り出しました。

子どもたちといっしょに、黒いぶたや、ふとったひつじが二三匹走って来ます。

兵たいさんのそばまで来ると、子どもたちは、いきなりどなうの上に向けあがらうとして、ころげ落ちるものもあります。

先にあがった子どもの足を引っぱって、はねのけようとするものもあります。

「けんくわをしてはいけない。」

「仲よくあがって来い。」大きな声で、兵たいさんがしかるやうにいひます。(17)

これらの国民科国語の教材と比較すると、国定第四期から削除された教材は、戦闘行為の生々しさや、文語文などのわかりにくい表現によって削除されたと思われる⁽¹⁸⁾。国民科国語では、軍国主義教材が増えているが、多くは生活に密着した兵士の生活や手紙などであり、戦闘行為を描いたものは少ない。それは、かえって兵士や戦地のことを身近なものに感じて、考えていくことになる。軍国主義の教材を強制的に押しつけるのではなく、このように身近で生活に密着した教材に軍や兵士、軍備などを登場させることで、教材を読んだだけで戦争参加意欲を湧かせ、国のために働くという忠誠心を湧かせ、自発的にそして主体的に児童の内面から「皇国民の錬成」をさせようとした意図が伺える。

第3節 教材の語彙に見る皇国の内容

第三点の軍国主義の語彙の数がどのように増減しているかという点を明らかにするために、国定第一期から国民科国語までの教科書本文から、軍国主義に関わる語彙の数を調査した。この調査は、教材数ではなく、語彙数で行った。一つの教材に「戦争」という語が一度登場するのと、十数回登場するのでは、その語彙を読み、音読した児童の印象は大きく異なる。語彙の数は心理的にも影響を及ぼすと考えられるからである。

まず、「皇」の字の使われ方に着目した。皇国化であれば、「天皇」「皇后」などを中心とする「皇」の字が多く増えると思われたからである。表5-8がその集計表である。

表5-8 国定教科書にみられる皇国に関する語

	天皇(※1)	皇后	陛下(※2)	皇太后	皇子	皇国	皇帝	皇軍	その他
第一期	51 (42)	9	19 (17)	0	0	0	0	0	1
第二期	63 (37)	8	15 (10)	0	9	1	0	0	34
第三期	19 (11)	2	4 (3)	2	3	0	2	0	12
第四期	56 (20)	1	7 (4)	6	1	2	1	0	16

国民科国語	67 (30)	13	25 (13)	4	1	3	3	10	23
-------	---------	----	---------	---	---	---	---	----	----

※1 ()は「天皇」の語がある教材のうち、教科書発行当時の存命した天皇が登場する教材数で、内数。

※2 ()は「陛下」の語がある教材のうち、「天皇陛下」の語である教材数で、内数。

この結果、国民科国語では「天皇」の語が増加しているが、「陛下」をともなった敬語表現が増えて
いる。しかし、「天皇」の語自体は国定第二期や国定第四期に比べてあまり増えたとはいえない。この
点からも、第一期から国民科国語の国定読本全体が皇国主義というよりも国家主義教育であると言えよ
う。

次に、軍事用語について調査した(表5-9)。軍事用語は多数あるが、国民科国語の教材に登場した単
語を中心に調査した。

表5-9 国定教科書にみられる軍事用語の数

	戦争	兵	軍	潜水艦	戦艦	戦車	戦闘機
第一期	12	38	66	0	0	0	0
第二期	6	85	155	0	9	0	0
第三期	10	78	94	0	1	0	0
第四期	6	120	170	1	3	12	7
国民科国語	14	279	245	29	15	13	2

この結果を見ると、「戦争」の語の増加率に比べて、「兵」や「軍」、軍備などの語が大幅に増加し
ているのがわかる。「軍」や「兵」に関しては、「太平記」や「平家物語」などの語彙も含まれるので、
必ずしも、当時の状況の反映とはいいがたいが、それでも、「兵」に至っては、倍増している。教材に
兵士が多く登場するのも国民科国語の軍国主義教材の特徴である。

そこで、国や外国の地名など地理的な語を調査した。まず、「日本」「国」「忠」の語を調査した(表
5-10)。「忠」の語は地理的ではないが、国家主義を示す語であるので、ここに含めた。

表5-10 国定教科書にみられる「日本」「国」「忠」の語

	日本	国	忠
第一期	51	224	4
第二期	70	345	50
第三期	78	318	17

第四期	135	256	17
国民科国語	167	278	16

この結果では、「日本」の語や「国」の語が大幅に増加している。「国」の語は日本に限らないので、諸外国、特に欧米の国名はどの程度登場しているかを調査すると、表5-11の通り、国民科国語で急激に減少している⁽¹⁹⁾。ただ増えているのは、侵攻した満州である。国民科国語の軍国主義教材では、満州の子どもが多く登場し、兵士を礼賛し、日本を賛美するなど日本に対する忠誠心を示している。それを読んだ児童は、自分も忠誠心を示そうという気持ちになり、戦意を高揚していく。「日本」の語が増えたのは、国家主義の促進させた教材が増えたからである。

表5-11 国定教科書にみられる諸外国の語

	アメリカ・ 米国	イギリス・ 英国	フランス・ 仏国	ドイツ・ 独逸	満州
第一期	15	6	4	3	0
第二期	18	12	6	7	12
第三期	29	13	12	6	1
第四期	24	11	9	5	11
国民科国語	8	6	1	1	24

国民科国語では、欧米の地名が減少している。その反面、満州が多く登場している。カタカナで登場する地名の上位は表5-12次の通り。東南アジアの地名が多い。

表5-12 国民科国語の教材に登場するカタカナの地名の上位

語数	地名
10	ジャワ、セレベス
8	ラバウル
6	アメリカ、インド、スマトラ
5	オランダ、クチン、フィリピン

また、表5-13の通り「平和」「自由」の語も減少している。

表5-13 国定教科書にみられる「平和・自由」の字

	平和	自由
第一期	0	3
第二期	3	8
第三期	4	14
第四期	5	17
国民科国語	1	7

教科書に登場する語彙では、「天皇」の語はあまり増えず、「天皇陛下」の用例が増えているだけで、むしろ、「兵」「軍」の語彙が増加している。これは、国民科国語の教科書編纂が途中から戦時下になり、戦争状況に応じた教材が増えてからである。その一方、「日本」の語彙は増えていて、欧米諸外国の国名は減少している。地名では、東南アジアの地名が多く出され、戦局と比例した語彙の使用になっている。入江曜子は西欧世界と断絶し、南進を肯定し、武力による領土拡大を児童に植え付けるために教材から西欧が消えたと指摘している⁽²⁰⁾。

語彙調査は、本来の語彙の使用ではない場合がある。「天皇」にしてもいつの世の天皇なのか語彙からは不明である。しかし、「天皇」の語を使用すればするほど、記憶に入り込み、その素材が印象に残っていく。「天皇」の語彙数は減少していないので、「ナショナリズム」の教科書であることは、国定第一期から続いたと考えられる。その上で、「天皇」よりも「兵士」や「軍」などの戦争に関わる語彙が多く、「平和」や「自由」の語が少ないことは、国民科国語の教材は、「ミリタリズム」の教材であるが、軍国主義を支える思想に天皇制があるのはいままでのないだろう。国民科国語の戦争教材は、天皇制の上に成り立ち、児童を軍国主義思想に染めていくメディアであったと言えよう。

